

漢字に対する日本人の意識と行動：計量的方法による検討

横山 詔一・高田 智和・阿部 貴人（国立国語研究所）

1. 目的

日本の電子メールで「ひのき」を漢字変換すると、「桧」あるいは「檜」が表示される。「桧－檜」は読みも意味も同じで形が異なる異体字の関係にある。日本の国民各層に異体字ペア「桧－檜」を見せて、どちらの字を使いたいと直観的に選択させると、どのような結果になるだろうか。たとえば、若い女性は流行に敏感で、新しいものを好む傾向にあると言われている。「檜」のような JIS 第 2 水準の旧字体は、形が複雑で読みにくく、スマートではないという印象を読み手に与えるため、心理的に敬遠されるのではないかと予想される。果たしてそうなのだろうか。

この問題に関して、横山（2004）はインターネットの Web 画面に異体字ペア「桧－檜」を表示して調査をおこなった。質問は以下のようなものであった。

あなたがパソコンなどで文字を打っているとしたら、「桧－檜」のどちらの字を使いたいですか？
2つの漢字をよく見て、より使いたいと思う方の字を選んでください。

全国約 12 万人の調査協力者から 480 名の女性をランダムサンプリングし、上記の質問に対する反応を収集した。その結果、20 歳代は旧字体「檜」を選択した割合が 70%近くを占め、新字体「桧」の 30%を圧倒することが明らかになった。若い女性は「檜」を心理的に敬遠するという予想は支持されなかったことになる。ところが、40 歳代になると、逆に新字体「桧」を選択した人が約 60%に増加して、逆転現象が生じることが分かった。さらに 50 歳代では「檜」が約 30%に落ち込み、「桧」が約 70%を占めるようになった。つまり、20 歳代と 50 歳代の傾向はまるで逆で、中年層以上は旧字体「檜」をあまり選択しないことが示された。

では、異体字ペア「会－會」ではどうであろうか。この場合は、すべての年齢層で、ほぼ 100%の人が「会」を選択し、「會」はほぼゼロになる（笹原・横山・ロング，2003）。これは、「会」が常用漢字であるため「會」にくらべると眼にする機会が多く、国民各層の心の中になじみの感覚が定着しているためだと考えられる。

さて、ここで次の疑問が生じる。

異体字ペア「桧－檜」の違い（以下、差分という）は「会－會」である。「会」を選択する人の割合は 100%なのに「桧」は 30%にとどまるのはなぜか。

「桧」を構成要素に分解すると「木＋会」になる。同様に、「檜」は「木＋會」となる。「桧－檜」ペアの形の識別にかかる差分は「会－會」である。「会」はほぼ 100%の人に好まれている。よって、「会」を要素とする「桧」は、どの年齢層においても 100%近くの人に好まれて当然だと考えられる。しかし、事実はそうではない。先に述べたように 20 歳代は「桧」を好む人は 30%にとどまり、「檜」の 70%に遠くおよばない。このようなパラドックスが生じるのはなぜであろうか。

この問題を解く手がかりを得るため、表 1 に示す異体字ペアのセットを取り上げて検討をおこなう。

漢字を構成要素に分解し、異体字ペア間の差分を同定したうえで、その差分が異体字の好み（あるいは選択行動）にどのような影響を及ぼすのかを吟味する。たとえば、「観—観」ペアのケースでは「観」が常用漢字であり、ほぼ 100%の人が「観」の方を選択することが先行研究のデータで示されている。そのことをふまえて、「灌—灌」ペアでは「灌」を選択する人の割合が圧倒的に多くなるのか、そうではないのかをランダムサンプリング法による大量データによって検証する。

2. 方法

調査対象者

年齢要因は 4 群（20 歳代 100 名、30 歳代 100 名、40 歳代 100 名、50 歳代 89 名）で、計 389 名。居住地域は、東京都葛飾区、東京都江戸川区、上記以外の東京都ならびに神奈川県エリア。調査対象者は全員女性であった。調査は 2006 年 3 月 15 日（水）から同年 3 月 20 日（月）にインターネットを介して実施した。

手続き

以下の教示を与えた。「この調査は、漢字の使われ方を調べるものです。これから、字の形は違いますが、読みと意味がまったく同じ漢字のペアをお見せします。たとえば、「亜—亞」は、同じ読みで同じ意味の漢字のペアです。もし、あなたがワープロを打っているとしたら、どちらの字を使いたいか、教えてください。二つの漢字をよく見て、使いたいと感じる程度を比較し、より使いたいと思う方の字を選んでください。両方とも使いたい、あるいは両方とも使いたくないと感じるペアがあるかも知れませんが、とにかく、どちらか一方の字だけを選択してください。判断は、あまり深刻に悩まずに、直観的に行ってください。」

表 1 異体字ペアのセット

セット 1：観—観，灌—灌
セット 2：会—會，桧—檜
セット 3：経—經，頸—頸
セット 4：亜—亞，壺—壺
セット 5：竜—龍，籠—籠
セット 6：螢—螢，鶯—鶯
セット 7：銭—錢，賤—賤

呈示刺激

表 1 の 7 つのセットについて平成明朝体グリフの画像データをインターネットで送信して調査対象者の自宅の Web 画面に表示した。呈示順序の効果のほか、新旧字体の呈示位置の効果を除くため、異体字ペアの呈示順序をランダムな順番にしたうえで、新旧字体の左右の呈示位置もランダム化した。

3. 結果と考察

(1) 常用漢字の選択率がほぼ 100%のケース

【典型事例】セット 1：観—観，灌—灌

図 1 に「観—観」ペアの選択結果を示す。ほぼ 100%の人が常用漢字「観」を選んだことがわかる。このことから「灌—灌」ペアにおいても常用漢字の構成要素を含む「灌」を多くの人を選択すると予想される。しかし、図 2 に示すように「灌」を選ぶ人の方が 60%から 80%に達することが明らかになり、予想は支持されなかった。

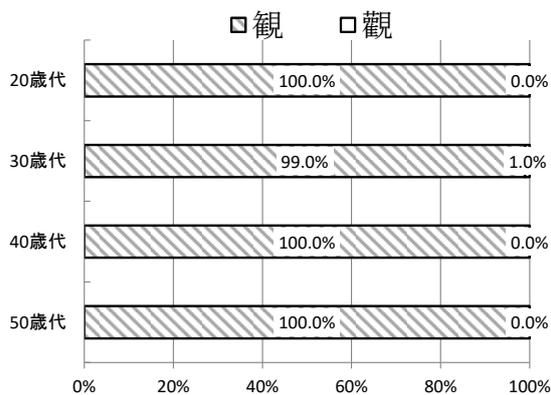


図1「観-観」の選択結果

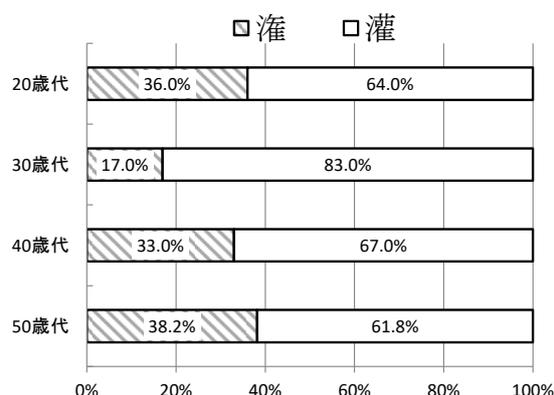


図2「灌-灌」の選択結果

【典型事例】セット2：会-會，桧-檜

図3に「会-會」ペアの選択結果を示す。ほぼ100%の人が常用漢字「会」を選んだ。次に、図4に「桧-檜」ペアの選択結果を示す。20歳代で「桧」を選択した人は約30%にとどまり、「檜」の約70%におよばない。ところが、50歳代では「檜」が約40%に落ち込み、「桧」が約60%を占める。この結果は横山（2004）とよく一致する。先に述べたように「桧-檜」ペアの形の識別にかかる差分は「会-會」であり、「会」がほぼ100%の人に選ばれることから、「会」を要素とする「桧」も100%近くの人に選ばれて当然だと予想できる。しかし、図4はその予想を支持しない。

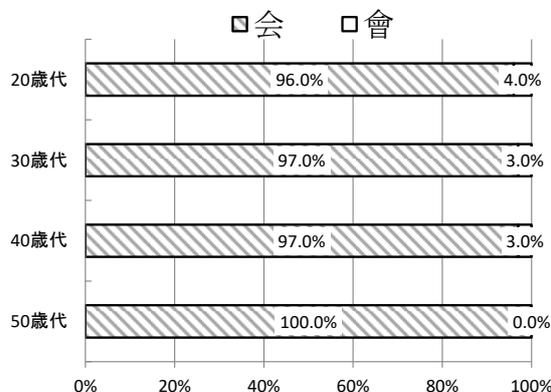


図3「会-會」の選択結果

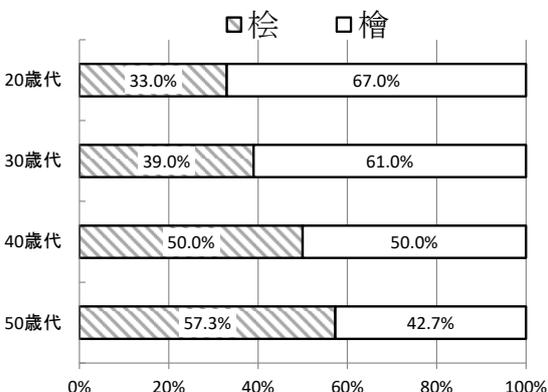


図4「桧-檜」の選択結果

(2) 常用漢字の選択率が60%から80%前後のケース

【典型事例】セット6：蚩-蝨，鶯-鶯

図5に「蚩-蝨」ペアの選択結果を示す。20歳代で常用漢字「蚩」を選択した人は約80%，50歳代では約60%であった。常用漢字ではない旧字体「蝨」を選択する人の割合が年齢とともに増加することがわかった。次に、図6に「鶯-鶯」ペアの選択結果を示す。30歳代を除いて、「鶯」を選んだ人は約50%であり、「鶯」の選択率とほぼ同じであった。30歳代はほかの年代よりも旧字体「鶯」を好む人の割合が高いが、その理由は現時点では不明である。

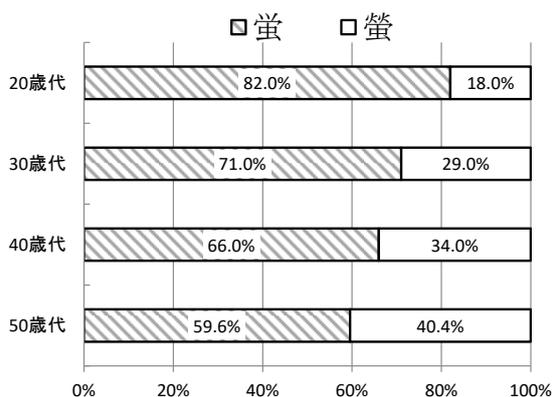


図 5 「螢－螢」の選択結果

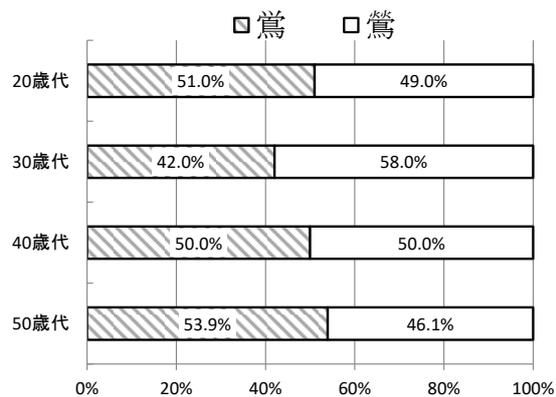


図 6 「鶯－鶯」の選択結果

(3) 常用漢字の選択率が低いケース

【典型事例】セット 5：竜－龍，籠－籠

図 7 に「竜－龍」ペアの選択結果を示す。常用漢字「龍」を選んだ人はどの年代でも約 20%にとどまることが明らかになった。常用漢字であっても非常用漢字より人気がないケースが存在することを実証した珍しいデータだと言えよう。図 8 は「籠－籠」の選択結果である。「籠」を選んだ人が 65%から 90%に達した。ちなみに、2010 年 11 月に「籠」は新常用漢字となった。

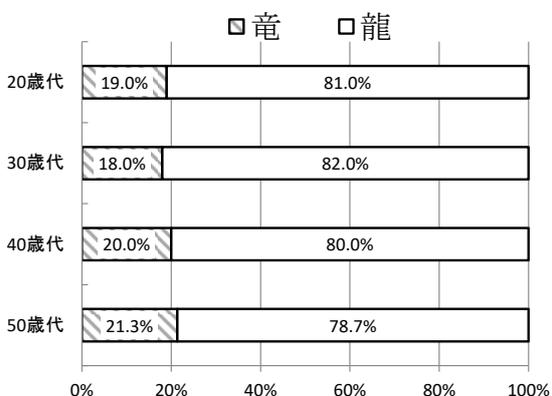


図 7 「竜－龍」の選択結果

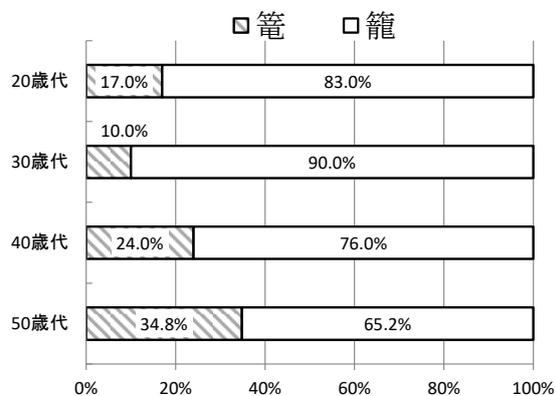


図 8 「籠－籠」の選択結果

4. おわりに

文字生活に関する基礎研究は、日本語学習者の漢字習得研究にも新たな理論的基盤を提供するものと期待される。たとえば、高田（2014）は台湾の日本語学習者が日本人にメールを送る際にどのような漢字字体を選択するかを検討している。

引用文献

- 笹原宏之・横山詔一・エリク＝ロング（2003）『現代日本の異体字—漢字環境学序説』国立国語研究所プロジェクト選書 No.2, 東京：三省堂。
 高田智和（2014）「日本語学習者の漢字字形の選好」高田智和・横山詔一（編）『日本語文字・表記の難しさとおもしろさ』, 220-233. 東京：彩流社。
 横山詔一（2004）「文字処理の認知科学」『言語』33(8), 56-63. 東京：大修館書店